

## ナツハゼの実生繁殖法

諏訪理恵子・矢吹隆夫

(福島県農業試験場いわき支場)

Seedling Propagation Method of *Vaccinium oldhamii*

Rieko SUWA and Takao YABUKI

(Iwaki Branch, Fukushima Prefecture Agricultural Experiment Station)

### 1 はじめに

ナツハゼはツツジ科スノキ属の落葉低木で、初夏に新葉が赤みを帯びる。北海道から九州、朝鮮・中国に分布し、丘陵地や明るい二次林に自生している。生け花の花材として人気があり、市場流通しているが、その多くは山採りされたものである。増殖方法としては、難発根性の為に挿し木は困難とされている。また、実生繁殖もこれまで発芽率が低く、発芽まで1年以上を要するとされていた。

本研究では、ナツハゼを採種後、間をおかずに播種することにより、短期間で高い発芽率が得られることを明らかにしたのでここに報告する。

### 2 試験方法

- (1) 試験年次 1998~2000年
- (2) 供試品目 ナツハゼ  
福島県岩瀬郡内より採種
- (3) 試験場所 福島県農業試験場いわき支場  
加温ガラス室 (最低温度15℃)
- (4) 試験区の構成  
試験1では発芽温度とナツハゼ種子の発芽率との関係を調査するため、発芽温度を16℃、23℃とした。試験2ではジベレリン処理によるナツハゼ種子に対する休眠打破の効果を調査するため100ppm6時間、100ppm24時間、100ppm72時間、500ppm6時間のジベレリン処理区と、無処理区を設けた。試験3では播種用土の違いと種子選別及び種子消毒の有無による発芽率の差異を調査するため、播種用土に鹿沼土とパーミキュライトの混合用土区、鹿沼土と調整ピートモスの混合用土区を設け、種子選別の有無ならびに種子消毒の有無と発芽率を調査した。播種粒数は1区50粒で調査した。
- (5) 栽培概要等

試験に供試したナツハゼ種子の採種時期は、9月下旬から10月上旬頃で、その頃のナツハゼの果実の状態は果皮の色が紫がかった茶色で、果実が黒くなる前の赤みが残っている段階であった。この時期に採種したナツハゼ種子は、種皮の色が薄く、硬実化していない。各試験年次におけるナツハゼ種子の採種時期と播種時期は次の

とおりである。

1998年 10月8日採種 10月27日播種

1999年 10月5日採種 10月19日播種

2000年 9月28日播種 10月16日播種

上記の時期に採種したナツハゼ種子を5号プラスチック鉢に播種し、覆土をせずに底面給水法でかん水を行い発芽率を調査した。試験1の発芽温度16℃区と試験2及び試験3は、加温ガラス室において、発芽温度(地温)をそれぞれ16℃、23℃に設定して試験を行った。試験1の発芽温度23℃区は、電熱線を設置した発芽器内で試験した。試験3で用いた播種用土は、鹿沼土とパーミキュライトの混合用土ならびに鹿沼土と調整ピートモスの混合用土であるが、ともにそれぞれの用土を体積比1:1の割合で混合している。また、種子選別有の区は充実した種子を選んで播種し、種子消毒有の区は70%エタノールに5秒間種子を浸漬して種子消毒した後、軽く水洗してから播種した。

### 3 試験結果及び考察

#### (1) 試験1 発芽温度

発芽温度の違いによるナツハゼ種子の発芽率は、発芽温度を最低16℃に保った場合の発芽率が7%に対し、最低23℃の場合は19%であった(表1)。

以上のことから、発芽温度を最低23℃と高くすることで、ナツハゼ種子の発芽率は高くなる。

#### (2) 試験2 休眠打破

ジベレリン処理の違いによるナツハゼ種子の発芽率は、無処理の場合の発芽率が70%であったのに対し、100ppm6時間のジベレリン処理で66%、100ppm72時間の処理で70%、500ppm6時間の処理で72%と、無処理と比較して大きな差は生じなかった。100ppm24時間のジベレリン処理をした場合の発芽率は34%であった。このことから、ジベレリン処理の違いによるナツハゼの休眠打破効果は判然としなかった(表2)。

以上のことから、ナツハゼを採種後、間をおかずに播種する場合は、ジベレリン処理は必要無いと考えられる。

#### (3) 試験3 播種用土及び種子選別と種子消毒

鹿沼土とパーミキュライトの混合用土を用いた場合、

種子選別および種子消毒の有無にかかわらず、播種1ヵ月後には概ね50%発芽し、播種6ヵ月後には概ね70%が発芽した。鹿沼土と調整ピートモスの混合用土を用いた場合も播種1ヵ月後には概ね50%発芽し、播種6ヵ月後には概ね60~80%が発芽した。中でも、鹿沼土と調整ピートモスを等量混合した用土に播種した場合に、発芽率が80%と最も高くなった(表3)。

4 まとめ

ナツハゼの種子は、果実が熟して黒くなる前で種皮の色が薄く、硬実化していない時期に採種し、2~3週間間に播種して温度を23℃に保つと、半年以内に70%程度発芽させることが可能であることが明らかになった。このことにより、これまで1年以上必要とされていた発芽までの期間が短縮された。しかし、ナツハゼは展葉後の生育速度が遅い為、定植苗となるまでには長い年数を要する。圃場展開を迅速に行う為の育苗技術については、今後の課題と考えられる。

表1 発芽温度の違いによるナツハゼ種子の発芽率

| 発芽温度<br>(℃) | 発芽率(%) |      |     |     |
|-------------|--------|------|-----|-----|
|             | 1/11   | 2/24 | 3/8 | 4/6 |
| 16          | 6      | 6    | 7   | 7   |
| 23          | 16     | 18   | 19  | 19  |

採種時期：1998年10月8日

播種時期：1998年10月27日

種子選別：無

種子消毒：無

播種用土：調整ピートモス

表2 ジベレリン処理の違いによるナツハゼ種子の発芽率

| 処理濃度<br>(ppm) | 処理時間<br>(時間) | 発芽率(%) |      |      |
|---------------|--------------|--------|------|------|
|               |              | 12/3   | 1/14 | 3/15 |
| 100           | 6            | 48     | 66   | 66   |
| 100           | 24           | 18     | 34   | 34   |
| 100           | 72           | 58     | 68   | 70   |
| 500           | 6            | 60     | 72   | 72   |
| 無処理           | —            | 48     | 70   | 70   |

採種時期：1999年10月5日

播種時期：1999年10月19日

播種用土：鹿沼土、調整ピートモスの混合

発芽温度：最低23℃

表3 播種用土及び処理の違いによるナツハゼ種子の発芽率

| 播種用土     | 種子選別 | 種子消毒 | 発芽率(%) |      |      |
|----------|------|------|--------|------|------|
|          |      |      | 11/30  | 2/13 | 4/11 |
| 鹿沼土      | 有    | 無    | 68     | 70   | 72   |
| バーミキュライト | 有    | 有    | 56     | 68   | 68   |
| 混合       | 無    | 無    | 48     | 68   | 70   |
| 鹿沼土      | 有    | 無    | 50     | 58   | 60   |
| 調整ピートモス  | 有    | 有    | 62     | 76   | 78   |
| 混合       | 無    | 無    | 52     | 74   | 80   |

採種時期：2000年9月28日

播種時期：2000年10月16日

種子選別：充実した種子を選別

種子消毒：70%エタノール 5秒浸漬

発芽温度：最低23℃